

〔編集後記〕

安井琢磨先生、喜多村浩先生の古稀をお祝い申し上げ、両先生が専任を退かれてから一年が経った。19巻の2号を古稀記念号として献げる計画をし、両先生の御薫陶を受けた若い人々が、それぞれに力作を締切の10月末までに送って下さったのに、教授たちが学内雑務の繁忙に追われて遅くなり、発行が両先生71歳の御誕生日にも間に合わなかったのは本当に申し訳ないことである。お赦しを乞う次第である。

喜多村先生には客員教授として、専任の時と同じように毎週御講義を頂いているが、安井先生は御遠方のために集中講義の時しかお目にかかれなくなり、淋しさも一入である。「鬼の安井」などと仇名しながら、その厳しい御指導がまた嬉しくて、学生たちは食堂にゆかれる先生をいつもゾロゾロと取り囲んでいったのであった。両先生の御健康と、自由な御活躍のよき実りを心からお祈り申上げる。(村上雅子)